わんりぃ

217号
2016 / 10 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりぃ’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
http://wanli-san.com/
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりぃ’ HPのアドレスが上記になりました。

広場の舞　広場の舞は近年中国全土に広がる娯楽の一つで、ラジオ体操の一種として体を鍛えるためにみんな楽しんでいます。社交ダンスのように踊る人もいれば、写真の人のように自由に踊る人もいます。（2016年4月）

撮影：満柏（日中水墨協会会長）

‘わんりぃ’2017年10月号の目次は20ページにあります

北京雑感・その 107

中秋節

有為楠(ういくす) 君代

今年の中秋節は、9月15日でした。中秋節は、旧暦の8月15日で、このころは季節的にも、空が澄んで、月が特に美しく見えるので、中国の人々は、月を愛でる日として大切にしてきました。

家族の団らんを最高の幸せと考える中国の人々は、中秋節に家族が集まって、楽しく食卓を囲むのが理想でした。しかし、時代と共に活動の場が広がるにつれて、一堂に会することが出来ない時は、どこからでも同じように見ることが出来る、空に浮かぶ月が、人々の心を繋ぎました。

中秋の月は、一年の中で一番明るく大きく見えるので、人々は月を鏡と見做して、その中に、遠く離れて暮らす家族や友人が幸せに暮らす姿が見えるようにと、祈りを込めてながめるのでした。

その大切な月をお菓子に映したのが月餅です。人々は、日頃のご無沙汰を謝し、元気でいることを伝えるために、日頃お世話になっている人や、親しい友人にこの月餅を贈るようになりました。

ここに目を付けたのが、経済発展の波に乗り、規模を大きくしてきた企業です。営業活動の一環として、顧客に月餅を配るようになり、贈答用月餅の包装はますます派手になり、価格はどんどん高騰していきました。その頃は、8月になると有名ホテルや老舗菓子店の店先には、赤い毛氈で覆われた机が並び、華やかな月餅の箱が積み上げられ、その華やかさは毎年エスカレートしていきました。

そこへ習近平主席の贅沢撲滅の発言があり、公務上の宴会での飲酒禁止と、月餅贈答の自粛が推進されることになりました。特に月餅は、それより前から、環境保護の観点に立って、過剰包装が問題視されていましたので、ここでやっと華美な包装の月餅は姿を消しました。派手なことは禁止されても、月餅の贈答行為自体は禁止されたわけではなく、今でも中秋節が近づくと、仕事によっては事務所に月餅の箱が山と積まれる会社があったりします。

一般市民は心を込めて、月餅を贈ったり贈られたりしますが、自分自身でも、有名ホテルやレストラン、老舗菓子店などが売り出す独自の月餅を買って来て、家で味比べを楽しんだりします。

前にもお話ししたように、北京のお菓子屋さんは、和菓子で言えば、きんつばとか、最中とか、お饅頭のような感じのお菓子まで、 平たいお盆に山盛りにして、ショーケースに並べて、量り売りをします。「1斤(500g)○元」と表示してあり、物によっては4，5個買っても500g以下で、とても安く買えた印象で、幸せを満喫したものでした。

ところが月餅は、 他の多くのお菓子が0.4元とか0.6元とか表示してある時でさえ、0.8元とか1.2元とか少し高めで、しかもその値段は1斤ではなくて1個の値段なのです。月餅の値段は、他の食料品と比べると随分高いのですが、中国の人々にとっては、なくてはならない季節もののお菓子なのです。

因みに、昨年北京で売っていた直径6 ～ 7センチの月餅は、1個が最低で8元、高いものは1個14元位のものが多いようでした。

中国の人々にとって大事な中秋節ですが、2007年までは休日ではありませんでした。それが、2007年の休日法（正式には「全国年節および記念日休暇弁法」と言います）の改正で、2008年より、中華民族の伝統的祭日が法定休日となりました。

それまでは、元旦1日と、春節・労働節（メーデー）・国慶節がそれぞれ3日の休みでした。それが、2007年の改正で、新たに伝統的な祝日である、清明節（4月初旬）、端午節（旧暦5月5日）・中秋節（旧暦8月15日）がそれぞれ1日の休みとして加えられ、労働節が3日の休みから1日の休みに変更されました。

中国では、毎年政令によって、それぞれの休み前後の土日を振り替えて、春節・国慶節は7日間、その他の休みは3日間の連休とするので、中秋節も3連休となります。

今中国では、新幹線の建設が盛んで、各都市間がどんどん近くなっていますので、今までは月を鏡として故郷をしのんでいた人々が、3日の休みと新幹線を利用して、実際に故郷に帰って、家族に会って来ようと、気軽に思えるようになったのではないでしょうか。

Lún yǔ piàn duàn 论语片断 『論語』あれこれ 20

不憤不啓 (Bú fèn bù qǐ)

憤せざれば啓せず〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授／孔子学院講師 植田渥雄

人材を育てるということは容易なことではない。孔子はそのことを十二分に心得た人でした。『論語』に次のような言葉が見えます。「苗而不秀者，有矣夫！秀而不实者，有矣夫！(Miáo ér bú xiù zhé，yǒu yǐ fú! Xiù ér bù shí zhě，yǒu yǐ fú!)」(苗にして秀でざる者、有るかな。秀でて実らざる者、有るかな)〈子罕第九〉。せっかく苗を植えても穂が出ない、穂が出ても実を結ばない、そういうことって有るもんだなあ。「矣夫」は慨嘆を表わす助辞で、この二字には話し手の実感が込められています。言うまでもなく、人材の育成を穀物の生育になぞらえた言葉です。素質がないわけではないのに、いくら頑張って育てても、一向に育ってくれない。そういう弟子もいるものだなあ……。孔子にしてこの嘆き有り、ということでしょうか。教育に一生をささげた孔子だからこそ言える言葉かもしれません。

教えを乞う者があれば、孔子は拒むことなく教えました。「束脩を行いて自り以上は、吾未だ嘗て誨うること無くんばあらず」〈述而第七〉。多少にかかわらず月謝を払って入門した者には分け隔てなく教える。これが孔子の教育方針でした。また、次のようにも言っています。「有鄙夫，问於我。空空如也。我叩其两端而竭焉(Yǒu bǐ fū, wèn yú wǒ。Kōng kōng rú yě。Wǒ kòu qí liǎng duān ér jié yān)」(鄙夫有り、我に問う。空空如たり。吾其の両端を叩いて竭す)〈子罕第九〉。ある身分の低い者が教えを乞いにやって来た。全く無知であったから、できる限り丁寧に教えてやった、と。両端を叩いて竭すとは、噛んで含めるように丁寧に教えることです。孔子の真骨頂が目に浮かぶような一節です。

しかし、いつもこの様な教え方をしていたわけではありません。また次のようにも言っています。「不愤不启，不悱不发(Bú fèn bù qǐ，bù fěi bù fā)」(憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず)〈述而第七〉。相手がやる気満々でなければ、教え導くことはしない。憤は、奮起の奮と同じ。つまり、やる気で心が盛り上がることです。啓は啓示の啓、教え示すことです。悱も同様、知りたいという欲求が心に充満して苛立つこと。発はその充満した心を開いてやることです。啓発という言葉はここから来ています。やる気のないものは啓発のしようがない、ということでしょうか。

孔子は続けます。「举一隅，不以三隅反，则不复也(Jǔ yì yú，bù yǐ sān yú fǎn, zé bú fù yě)」(一隅を挙げて、三隅を以て反せざれば、則ち復せざるなり)。四隅のうち一つの隅を挙げるだけで、他の三つの隅が反応しないようでは、同じことを繰り返し教えることはしない、と、更に手厳しい。つまり、打てば響くようでないと、いくら教えても意味がない、ということです。

ある時には、噛んで含めるように優しく、またある時には、突っぱねるように厳しく。孔子先生の弟子への接し方は実に多様で、かつ臨機応変でした。それでも育たないものは育たない。「矣夫」の二文字は、そのやるせない気持ちを見事に表わしています。

だからといって孔子は教えることを諦めたわけではありません。「后生可畏(Hòu shēng kě wēi)(後生畏るべし)〈子罕第九〉。若者は必ずや何かをやってくれる。時に愚痴をこぼしながらも、若者への期待が変わることはありませんでした。

（わんりぃ「中国語で読む漢詩の会」講師）

大連・長春・丹東の旅（その1）

寺西 俊英

2016年8月24日の正午より20分くらい定刻より早く、飛行機の窓越しに懐かしい街並みが眼下に広がった数分後、滑走路に着地した時の軽い衝撃が体に伝わってきた。第3の故郷ともいうべき大連に着いた。ちなみに第1の故郷は、生地の広島。第2は4年間単身赴任した新潟である。しかし大連は2007年から2年間しか生活しなかったけれども外国であるだけに格別の思いがある。大連については、これまでシリーズ「都市巡り」で2011年に何度か寄稿しているが、それから5年余り時が過ぎ去った中で、違った顔を見せる大連を今回の旅行を通して何回かに分けて紹介していきたい。10日間滞在した中で、長春や丹東にも旅したのでそれも書き加えたい。

大連のここ1～2年の変容で顕著なのが、地下鉄の開通である。しかも2路線が同時に開通した。工事期間は5～6年はあったと思うが、有名な円形の中山広場はその間周囲を3メートル位の青色の養生板で仕切られていた。それが綺麗に取り払われ以前の美しい光景に戻っていた。夜は見なかったがおそらく以前のように何色もの電飾で別世界を造りだしていよう。

昨年は地下鉄は、どちらの路線とも部分開通していたが、今年、予定路線はすべて開通したのだそうだ。大連空港には地下鉄2号線の駅が設置されたと聞いていたので、迎えに来てくれた友人に「地下鉄に乗りたい」と言って案内してもらった。

以前は空港建物から出てすぐのところでタクシーに乗っていたが、タクシー乗り場のすぐ近くに地下鉄の入り口があり大変便利である。階段を降りて切符売り場に到着し料金を見るとたったの4元。10元札を入れるとスイカのカードのような

ホテルの部屋からの風景。眼下に大連駅が見える（⬇）。

切符が出てきた。これは記念に1枚欲しかったが、目的地の駅で機械に回収されてしまった。今までは市内に行くにはタクシーで35元から40元かかっていたし、渋滞で遅くなるということもなくなったわけである。初乗り料金は私が大連にいたときは8元であったが、10元に値上げとなっていた。タクシーに乗ると客のことはそっちのけで大きな音で音楽をかける車ばかりでうるさいので「軽一点儿（qīng yī diǎnr）」（少し音量を下げてください）と言ってもどこ吹く風だ。おつりと言えばくしゃくしゃで触るのもはばかられるようなお札を寄越すということ等が減るわけで地下鉄は本当にありがたい。ホームドアはすべての駅に設置され安全で、車両も駅もきれいでいいことづくめである。ただしホームに入る前に、どこの都市の地下鉄や電車と同様日本と違って手荷物検査がある。

さて、ホテルは大連駅や勝利広場に近い「大連中山大酒店」という四つ星ホテルである。以前にも何度か泊まったことがあり定宿といったホテルだ。地下鉄はここに比較的近い「青泥窪橋（qīng ní wā qiáo）」（チンニーワーチァオ）駅で降りた。駅名の由来は以前にも書いたが、この地域の土地は昔から青泥を含ん

乗車券 ― パスポートNo.と名前が印字されている

でいる土質からそのように呼ばれた。「大連」という地名がつけられるまでは「青泥窪」という場所であった。

フロントでパスポートとＥチケットを見せると、200元の保証金（押金）を求められ、それを支払うと部屋の鍵（カード）を渡された。部屋は32階で早速エレベーターに乗る。エレベーターは低層階行きと高層階行きに分かれており、全部で6基くらいある。高層階行きに乗るとガラス張りになっていて綺麗な街並みがどんどん足元に消えてゆく。高所恐怖症の私は、なるべく遠くを眺める。32階に降りるとその階は日本人用の階と表示されていて（もちろん日本人以外でも宿泊可）、壁には浮世絵の版画がいくつか掲げてあった。部屋に入ると小さな日本人形がベッドのサイドテーブルの上に置かれていた。外を眺めると、1937年に上野駅にそっくりに建てられた大連駅が真正面に小さく見え、その向こうは大連港の一部が目に入ってくる。「海景房」（海の見える部屋）とでも言えようか。今日は快晴なのでその光景は絵葉書を見るようでうれしい限り。中国の友人が快晴の時よく言う「藍天白雲」とはこのような光景かな、と一人で納得する。

荷物を置いて１階ロビーの両替コーナーに行った。円高なので期待しながら５万円出すと、１万円に付き643元もらった。昨年９月に大連を訪れたときは、500元に届かなかったのでまずまずといったところか。2008年頃大連で仕事をしていたころは、700元以上に換金できたので、その頃が懐かしい。

現金を手にしたので一緒に大連駅に行き、27日の長春行きの高鉄（中国版新幹線・大連北駅からハルビン駅間）の切符を買いに行った。私は、高鉄はどの電車も新しく完成した新幹線用の「大連北駅」から出発するものだと、したがって大連北駅で乗車券を買うのかと思っていた。ところが大連駅から出発する高鉄もあり、乗車券も大連駅で購入できるという。大連北駅には、タクシーで30分はかかるので大助かりである。大連駅の窓口で朝９時15分大連駅発の高鉄の乗車券を購入することができた。購入時にはパスポートが必ず必要である。

切符を見るとG8007電車で座席は４号車の3F席である。　券面にはパスポート番号とTERANISHIと名前が入っている。後日27日に高鉄に乗車して分かったのであるが、車内に入ると通路を真ん中に、左右に座席は３人掛けと２人掛けに分かれている。 座席は３人掛けの方からABCとなっている。２人掛けの方はDとＦとなっていてＥ席はない。おそらくＥは中国語では1（イー）と発音が似ているためであろう、と思った。なお、地下鉄と異なり下車駅でこの切符はもらえるのでいい記念となった。

夕方は「捌七茶館」というお茶を扱っているお店に行き、お店の関係者と一緒に老板のお勧めの中華料理店で１年ぶりの再会を喜び合った。かくして24日は終わり、翌日の25日は、孫へのお土産や友人に頼まれた太極拳の本を求めて新華書店に行ったりして街の香りを感じながらゆっくり過ごした。次号は26日に大連市内から30キロあまり離れたところにある、歴史の町「金州」についてお話ししたい。　（続く）

「秋風辞」

（2016年9月18日）

報告：花岡風子

今日のお題はかの有名な漢の武帝による「秋風辞」という詩です。

この詩の内容に入る前に、作者の漢の武帝がいかなる人物か、というお話がありました。

漢の武帝は項羽と戦い天下を取った劉邦のひ孫にあたります。武帝の父親は景帝、祖父は文帝という共に優れた名君でした。

祖父である文帝は劉邦と薄氏という賢い側室との間に生まれました。劉邦には呂后という正妻がおり、劉邦は天下を取るために、妻の父親に助けられてきたこともあり、劉邦は生前正妻に頭が上がりませんでした。

しかし、劉邦は最愛の側室「戚」氏の子、如意を後継ぎにしたいと考えていました。劉邦亡き後、呂后は朝廷内を呂氏一族で固めようとし、戚氏と如意を殺してしまいます。しかも、戚氏へは積年の嫉妬を込めて、手足を切り落とし厠に入れ、皆に豚と呼ばせるという残忍非道なことをしています。呂后は息子の恵帝を立てますが、恵帝の後を継いだ二人の息子は、呂后の死後政争に巻き込まれ、不幸にして、即位後相次いで亡くなりました。複雑な跡目争いの末、ようやく劉邦と薄氏の息子である文帝が選ばれ帝位に着きます。薄氏は賢女らしく、呂后が猛威を振るっている間も陰に隠れて難を逃れました。後々三代続く皇帝が皆優秀なのも、特に武帝が文武両道に秀でた人物である事も、この母方の血を感じます（劉邦は田舎町のチンピラやくざ？の出でしたから）。

その文帝の孫、武帝は始皇帝と並び称される名君ですが、世界的には秦の始皇帝の方が有名ですね。Chinaの語源は秦のqinという国名から来ています。しかし、約400年続いた漢王朝の基礎を築き、ちっぽけな田舎町の名前だった「漢」を漢民族、漢字等、中華民族のアイディンティティを代表するビックネームに育て上げたのは他ならぬ武帝の功績なのです。

また、始皇帝は万里の長城を築き、異民族の侵入を防ごうとしましたが、武帝は長城を超え、西域に使者を送り、シルクロードを開拓し、東西の文化交流を図りました。

秦の始皇帝と違い、学問好きの文化人であった武帝は秦の始皇帝が焚書坑儒で徹底破壊した儒教を復活させ、国教と定めました。武帝が復活させてなければ、今日に至るまで世界中で『論語』が愛されている現実はなかったかもしれません。また、武帝は芸能好きで、楽府という部署を置き各地の民謡を集めさせたりしたセンスのある文人でもありました。そればかりでなく、大の女性好きという一面もあり、以前李延年という人の「佳人歌」を紹介しましたが、李延年の妹で絶世の美女李氏を

qiū fēng cí
秋风辞

hànwǔ dì　iú chè
作者 ：汉武帝・刘彻

qiū fēng qǐ xī bái yún fēi
秋风起兮白云飞
cǎo mù huáng luò xī yàn náng uī
草木黄落兮雁南归
lán yǒu xiù xī jú yǒu fāng
兰有秀兮菊有芳
huái jiā rén xī bù néng wàng
怀佳人兮不能忘
fàn lóu chuán xī jì fēn hé
泛楼船兮济汾河
héng zhōng liú xī yáng sù bō
横中流兮扬素波
xiāo gǔ míng xī fā zhào gē
箫鼓鸣兮发棹歌
huān lè jí xī āi qíng duō
欢乐极兮哀情多
shào zhuàng jī shí xī nài lǎo hé
少壮几时兮奈老何

愛したのもこの武帝でした。「英雄色を好む」の代表人物でもありますが、こういうところに武帝の人間らしさを感じてしまいます。

さて、この「秋風辞」は地位も名誉も財産も美女も全てを手にいれ人生の絶頂期を迎えた武帝が盛大な地神祭りの最高潮の瞬間にふと湧き上がった老いの寂しさを歌ったものです。

秦の始皇帝も最後は不老不死を求めて蓬莱の国日本にまで使者「徐福」を遣わせたりしましたが、権力者にも忍び寄る老いだけはどうしようもありません。

「最後の最後の一言が味わい深いですね。わたしなんかこの歳になると毎日この気持ちですが、あの漢の武帝も同じ気持ちを味わっていたのかと思うと、何だか安心するんですよね」

植田先生のコメントに一同大きく頷き、ハーッと吐息がいくつも重なりました。

老いの淋しさは万人共通ですね。まだ気分は若者のつもりでいる40代後半の私もいつの間にか老いの淋しさがわからない歳ではなくなったのか、この詩から伝わる武帝の気持ちが切なく胸に迫りました。

幸せの瞬間にふと忍び寄る淋しさの影、人の思いは民族を超え時代を超え、性別も身分も超えて普遍であることを感じた時に植田先生の「ほっとする」というお気持ちが少しわかったような気がしました。

夕方、静かに暮れ落ちてゆく鮮やかな夕日を眺めると、同時に迫りくる夕闇の暗さを感じる…あのなんとも言えない淋しさに似ている気がします。

さて、この詩は途中に「兮」という合いの手のような意味の無い字が入っています。

これは、屈原から始まった楚辞のスタイルだそうです。現代中国語ではxī(第1声)と読みますが、昔はhaという音で読んだようです。「どうもxīという音よりハーッと詠むと気分が出るんだよね」と植田先生が「兮」を「ハー」で読んで下さったのを聴いて納得!

xīと言う短く鋭い音に比べて人の溜め息を連想させる「ハー」で読むことでその前後の言葉が浮き上がり、この詩のテーマである「老いの哀しみ」を一層掻き立てているように感じました。

最後に項羽の辞世の詩である「垓下の歌」を先生がホワイトボードに書いて、武帝の詩と比較して朗読されました。

あまりにも有名な項羽最期の一句「虞兮虞兮奈若何!」(虞や虞や、若を如何せん)。楚辞の代表的スタイルで書かれたこの詩も「兮」という意味の無い置き字によって項羽の無念に満ちた悲しみを掻き立てられるのは気のせいでしょうか。

今回も漢詩を音で味わう楽しみだけでなく、詩が作られた歴史的背景、作者の人物像を知って想像をめぐらせつつ楽しめた贅沢な1時間半でした。

書き下し文

秋風起こりて白雲飛び,
草木黄落して雁南帰す。
蘭に秀有りて菊に芳有り,
佳人を懐しみて忘るる能はず。
楼船を汎べて汾河を済り,
中流を横ぎりて素き波を揚げ。
簫鼓鳴りて櫂歌発こる,
歓楽極りて哀情多し。
少壮幾時ぞ老いを奈何せん。

【'わんりぃ'の原稿を募集しています】

'わんりぃ'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりぃ'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりぃ'に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル'わんりぃ'

➢創価学会に注目した大物経済人

かつて高碕達之助（たかさき）という人物がいました。日本と中国が国交回復する以前、周恩来から篤い信頼を得ていた人です。高碕は戦前の旧満洲時代、満洲重工業開発株式会社の総裁として活躍し、敗戦後は、日本人の引き揚げにも大いに力を尽くしました。そして戦後は、鳩山内閣の時に経済審議庁長官として入閣し、1955年のインドネシアのジャカルタで開かれたアジアアフリカ会議に日本の政府代表として参加、新中国になって初めての国際会議に参加した周恩来と会談を行いました。

日本の敗戦後、周恩来が初めて日本の政界の大物と会談したのです。高碕は「私は、共産主義は嫌いだ、中国も資本主義でいくべきだ」と率直に語るような人物です。しかし、周恩来は高碕に好感を持ったようです。高碕の「ともかくお互いに貿易をしよう」ということで周恩来と意見の一致を見ました。

そして出来上がったのがLT貿易協定でした。Lは周恩来の片腕だった廖承志の頭文字、Tは高碕達之助の頭文字です。そして東京にLT貿易事務所が設けられました。そのLT貿易東京事務所は、国交回復前のいわば中国大使館のような役割をも担っていたのです。

周恩来は、高碕を経営者としても非常に高く評価していました。ある時などは、訪中した高碕を、かつて、高碕が指揮をとっていた旧満州の工場に案内し、高碕にアドバイスを求めました。

高碕は適切なアドバイスをし、すぐそれは生かされました。その高碕はかつて東京の信濃町に住んでいました。信濃町は創価学会の本部がある場所です。今でもJR「信濃町」駅を降りると、創価学会のいろんな建物がいくつも建っています。

1950年代から60年代にかけて創価学会は急速に成長し、会員を増やしました。しかし一部にやや強引な布教活動があり、知識人から、創価学会は批判的に見られていました。

しかし高碕には信濃町の学会本部にやってくる学会員たちが非常に真面目な人たちであると見えました。高碕はある時、周恩来に、「学会員には一般庶民が多く、平和問題にも熱心です。日中間の民間交流、そして将来の国家間の関係改善を目指すうえで、この勢力を無視することはできません。中国は創価学会と交流すべきです」と話したようです。（西園寺一晃著『周恩来と池田大作の一期一会』潮出版社）

➢有吉佐和子の周恩来への進言

有吉佐和子は1961年、亀井勝一郎を団長とする日本作家代表団の一員として訪中しました。私は改めて、その座談の時に通訳をし、現在上海に在住している周斌さん（著書『私は中国の指導者の通訳だった―中日外交　最後の証言』加藤千洋・鹿雪瑩訳、岩波書店）に電話で、その時の状況を聞いてみました。

周恩来は、日本の客人たちを気遣うように、団員たちそれぞれに話しかけます。有吉はその時、このような話をしたのです。「最近の日本ではいろんな宗教団体が活躍しています。その一つである創価学会は今急速に成長しています。その主体である構成員は真面目な勤労大衆です。中国は日中友好団体ばかりでなく、創価学会のような大衆団体となんらかの形で交流を始めたらいいのではないでしょうか」と進言したのです。その後、周恩来は対日業務に携わっていた孫平化に、創価学会に接触するように指示を出しました。

LT貿易東京事務所の代表に就いたのは孫平化です。孫は1917年、遼寧省蓋平県生まれ、旧満洲時代に日本に留学、1939年東京工業大学付属予備

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

有吉佐和子が貢献した知られざる日中交流

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類　善啓（おおるい　よしひろ）

部に留学後、同大の応用化学科に進学しました。しかし、もっぱらマルクス主義を勉強していた孫は、日本の中国侵略に我慢ならず大学を中退して帰国し、地下に潜って革命運動に全精力を傾けます。

そして新中国建国後は、周恩来、廖承志の下で対日関係の第一線で働きます。ある時、周恩来総理から創価学会をどう思うかと聞かれました。当時、孫は日本共産党の影響もあり、創価学会を「軍事化した恐ろしい団体」だと見ていたようです。その言葉を聞いた周恩来は、「実体を見ないで軽々しく言うな」と孫を叱りました。孫自身が著した『中日友好随想録（上）―孫平化が記録する中日関係』（武吉次朗訳、日本経済新聞出版社）に、こう書いています。

「周総理から〈創価学会という、この無視できない社会勢力を重視し、積極的に関係を結ばなければならない〉との指示を受け、われわれはようやく創価学会との関係構築に乗り出した。当初はあまり進展がなかったが、1974年12月、池田氏の二度目の訪中の折に周総理が病を押して病院で一行と会見して以来、〈この無視できない社会勢力〉と中国の付き合いは一貫して深化・拡大を続けており、周総理の予言を裏付けている。総理の死後、彼らは周総理への尊敬や感謝、深い思慕の念をすべて鄧女史（注：周夫人の鄧穎超のこと）に寄せ、今に至るまで親しい交際を続けている。私は〈知り合うのが遅すぎた〉と一度ならず反省した。だが、遅すぎるということはない。彼らとの友情には、ほかを追い越す勢いがあるのだから」。

➢中国と創価学会の結びつき

周恩来は非常に目配りの利いた宰相です。創価学会という宗教団体が、しっかりと日本の土壌に根付いた庶民たちの団体であると認識していたのでしょう。文化大革命が起こる以前は、中国は日本共産党や日本社会党と緊密な関係を持っていました。しかし、両党の下にいた労働者はいわば組織された労働者たち、しかし、創価学会にいた庶民たちは、そういう組織に組み込まれていない人たちでした。周恩来は、創価学会の中に日本における新しい民衆運動の大きな流れを見ていたのだと思います。

有吉佐和子は以前から創価学会の若い人たちが真面目であると好感を持っていたようです。その後、有吉は1965年6月、創価学会会長の池田大作氏と会談し、池田氏が中国に関心を示していることを確認しました。そして1966年5月「主婦の友」誌で有吉は池田氏と対談を行いました。その時、有吉は池田氏に「周恩来総理からの伝言があります。ぜひ中国にいらしてください」という言葉を伝えたのです。

その後、有吉は学会幹部に、中国の代表と会うよう勧め、孫平化と光明日報記者の劉徳有（後に中国文化部副部長）と会談しましたが有吉も同席しました。中国と創価学会が初めて接触した時でした。

1968年9月、東京・両国の日大講堂で創価学会学生部での大集会で、池田会長は、すみやかに日中が国交回復をすべきであると提言しました。当時は佐藤栄作内閣の時代で、アメリカに追随し中国敵視政策を取っていた頃です。

池田会長の発言は、朝日新聞の一面で取り上げられ、劉徳有氏は直ちに中国に池田氏の発言を打電しました。この発言以後、池田氏は右翼から脅迫されたと言われています。しかし、有吉によって少なからず築かれた中国と創価学会との関係は、その後の公明党訪中（1971年7月）につながり、そして田中角栄首相の訪中、日中国交回復へとつながって行ったのです。その意味で有吉佐和子は、日中国交回復に知られざる貢献をしていたのです。

有吉は国交正常化後も訪中し、人民公社に入り日本人としては稀有な体験をしました。それは『有吉佐和子の中国レポート』に纏められ、当時の中国を知る貴重な資料になっています。（次号に続く）

＊本稿は、周斌氏の他に、加藤千洋・同志社大学大学院教授、西園寺一晃・工学院大学孔子学院学院長、遠藤勝男・公明党元葛飾区議の皆さんからも貴重なお話を伺い執筆しました。（敬称略･順不同）

東西文明の比較(8)

陽光新聞社・顧問　塩澤宏宣

今から1万年以上前から2千年前までの縄文時代、日本列島にはどのくらいの人間（縄文人）が住んでいたのでしょうか。大変興味のあるテーマだと思います。

このテーマにはいくつかの説がありますが、一番有力な説は26万人ぐらい（縄文中期：約3000年前）というのが有力だそうです。この数値は、現在までに発見された縄文遺跡の数、居住地、集落規模などから推計されたものです。その内訳は東日本で25万人、西日本はわずか1万人ということです。

では、平均寿命はどのくらいだったでしょうか。残された骨から年齢を推定できますが、平均寿命を計算するには乳幼児の死亡年齢を計る必要があります。日本列島のほとんどが酸性土壌であるため、乳幼児の小さな骨がほとんど残っていません。つい最近まで、日本でも乳幼児の死亡率は高かったことを考えれば、この時代の乳幼児の死亡率は相当高かったでしょう。

人口学の分野では、7歳まで育つと後は無事に成長するといわれており、15歳まで育てば、その人は「プラス16歳」という研究結果があるそうです。この理論を当てはめると、縄文人の平均寿命は20歳程度ですが、15歳まで無事に育った人については、男性が31.1歳、女性が31.6歳の寿命であるとされています。

縄文人の死生観とはどういうものだったのか

縄文時代特有な遺物として土偶があります。土偶は、人物や動物をかたどっていますが、縄文時代の早期から存在しています。人物の土偶はすべて女性像です。乳房のほか、腹部を膨らませた妊婦を思わせる像は、現代アートをもしのぐ魅力があります。

では、このような土偶を何の目的で作ったのでしょうか。その解は3つあるそうです。

その一は「豊穣・多産を願う地母神」であるという説。旧石器時代のユーラシア大陸でも、ヴィーナス像が作られており、誕生の神秘からくる再生・豊穣の観念は、共通する物があります。

その二は「疾病・傷害などの災禍を転嫁するための呪物」説。土偶は「身代わり」として作られたとするものです。各地から発掘された土偶のほとんどすべてが完全な形をとどめていません。どこかが破損しているのです。おそらく意識的に一部を壊して埋めたのでしょう。

その三は「死者の再生を願った祭祀」という説。土偶は、母なる女性・子を宿す女性・子を育てる女性を意味し、懐胎―死―再生―誕生、という「輪廻観」に基づいた祭祀に使用されたといわれています。破損部分は、その再生を願ったのでしょう。どの説が正しいかは定まっていないようですが、それらがすべて包含されているという気がします。

土偶は、一種のよみがえりのための儀式に使われたのではないかと思います。

祈りと祭りのはじまり

超自然で不可解なことを解消し、さまざまな願いを成就するために、縄文の人々は祈りを捧げました。縄文人の自然へ向かう態度は、「森羅万象・万物に生命や精霊が宿る」と考えて神格化したことです。また、人と同等な生き物にも畏敬の念を抱き、その心を静めて災いを避けるために祈ったのです。そして、祈りを表現するために、日を決めて儀礼を行うのが祭りです。命日などを周期的に行う儀礼もその範疇といえます。このような心は、今も日本人にも残っているのではないでしょうか。

祈りの対象は「カミ」または土偶でした。「カミ」

とは、心の中に存在する崇拝心や宗教心だったのです。あえて「カミ」としたのは特定宗教のそれと区別するためです。自然界の持つ「自然の力」をいいます。

環状列石とはなにか

現代でいえば共同墓地です。縄文人は、石には霊が宿り、配石はあの世とこの世を分ける役割を持っていると信じていました。

環状列石は、長径30～40メートルの角を丸くした方形に配石した墓地です。相撲の土俵のように外帯と内帯（丸い部分）に石を配置し、その下部に墓穴を掘ってあります。血縁・地縁を持つ氏族の連合が、結びつきを強くするために造営した「祭りの場」ではないかといわれています。

その成立は縄文中期ごろ、東北太平洋側だといわれます。いまだ階層の分化はなく、手厚く葬る風習がなかった時代であったため、個人ではなく集団の結束に重心をおいていたようです。

この環状列石は、日本の墓石の源流ともいえるのではないでしょうか。また、イギリスや北欧にあるストーンサークル[注)]の兄弟か、と考えると夢が膨らみます。

縄文後期（2000年前）の後半からは環状列石がすたれ、土坑墓群という集団墓地になります。これらの共同墓地は、やがて20～30基の家族墓地へと変わっていきます。同時に故人が愛用したと思える装身具などの副葬品が添えられたケースが異常に高くなります。集団より「家族・個人重視」という価値観に変化してきたのでしょう。

ここで話題をちょっと変えてみます。

縄文時代の時代区分は、土器の形態分類を基準に決めています。しかし、本のページをめくるように時代が変わってきたわけではありません。再三ふれますが、縄文人のルーツはシベリアからオホーツク海を渡ってきた人たちと、長江流域から南西諸島・九州ルートがありました。

最近、富山県の小竹貝塚から91体の人骨が発見されました。縄文時代早期（6000年前）のものです。それら人骨をDNAで鑑定したところ、蒙古、ロシアシベリア型とタイ・マレーシア型そして台湾型があったそうです。日本人が二つのルートから渡来した証拠が明確になったようです。

この南北二つのルートから来た人々が、日本列島で出会ったのが中部東海地方ですが、そのときは何語で会話をしたのでしょうか。

文字も筆記具もない時代のことですから答えは永遠に出てこないと思いますが、古代人がどうやって会話し、経験を後世に伝えたのか、想像するだけでワクワクします。

以前、2015年11月号で「タミル人と日本人」を載せていただきました。その内容は「日本語のルーツはタミル語である」という大野晋先生の説を紹介した記事です。

そこで今回は、高島俊男先生の「漢字と日本人」から。「日本語のルーツはない。日本語は地球上どこにも親戚のいない孤立無縁の言葉である」となります。ルーツのない言語は、ほかにもたくさんあるようです。一番有名なのがフランスとスペインに挟まれたバスク地方の「バスク語」です。ちなみに漢語は「支那西蔵語族」、英語は「印欧語族」というヨーロッパ全域からアジア西部にまたがる世界最大の語族の一員です。

今私たちは、縄文人とひとくくりにしていますが1万3千年前のこの地、日本列島は想像できないくらい変化しているように思います。しかし、縄文時代を勉強すればするほど、現在の日本人の中に「縄文」が生きている（残っている）ようです。

次回はそんなことをテーマにしてみたいと思います。

■**注**：世界最古のストーンサークルは1990年代にフランス・ブルニケル洞窟で発見されたネアンデルタール人が作ったもの、と言われています。

フイリピン滞在記 ⑮---最近の様々な出来事から

ルソン大学日本語教師 為我井輝忠

フィリピンにいるのもあと１か月余りとなった。11月中旬には帰国の予定である。フィリピンでのこれまでの生活には不満や嫌なことはあまりなかったが、やはり日本での生活と比較すれば不便なことや満足できなことも多い。しかし、あと１か月となり終盤近くなると、すべてのことが浄化され、良い思い出に化してしまいそうだ。

今回は、身近なところからいくつか話題を選んで、書いてみたい。それらは次の通りである。

○知人のお子さんの洗礼式

○モンスーンの来襲

○ルソン大学で日本語を学ぶ学生を招いて日本語パーティを開く

1.知人のお子さんの洗礼式

現在私が教えているルソン大学の日本語授業で私のアシスタントをしているドミンゴ・パスカ氏から、生後２か月になる女の子の洗礼式を８月20日に教会で行うので、出席してほしいとの依頼があった。フィリピンはカトリックの国なので幼児洗礼が主体で、プロテスタントの場合とは異なる。当日10時から始まるので、それまでに来てほしいとのことであったが、依頼した車のドライバーが道をよく知らなかったため途中で何度も聞いたりしてダグーパンから教会のあるタユグまで２時間もかかり、着いたのが10時ぎりぎりであった。

洗礼式

教会の中に入ると、まだ何も行われておらず、パスカ氏に聞くと、他のグループの家族が来ていないので遅れるということであった。今回の洗礼式は他のグループ２組と合同で、やっと11時になって彼らが来たのですぐ始った。こんなところでもフィリピン・タイムが顔をのぞかせていた。式そのものは40分も掛からない。司祭の短いメッセージがあり、その後洗礼式のセレモニーがあった。司祭が赤ん坊の額に聖水を浸し、何人かの方々と共に私も彼女の額に十字を切り、共に祈るというものである。この役目はGodfatherの仕事で、私はGodfatherになることを依頼されていたので、その役目を果したが、多少緊張した。

洗礼式の後に食事に招かれた。およそ50～60人は招かれていたのではないだろうか。フィリピンではこの行事にかなりお金をかけて行われる。パスカ氏自身も決して裕福ではないが、このような時にはそれ相当のお金を使うとのことだった。目についたのはお祝い事には定番ともいえるブタの丸焼き（レチョン）が出ていたことである。もう一つ気が付いたことはお酒が出ていないことであった。

2.モンスーンの襲来

８月14日（日）から激しい雨が降り始め、４日間降り続いた。これは南国特有のモンスーンで、台風とはまた違う。この４日間ほとんど外に出ることは出来ず、買い物などもままならなかった。当然この間はパンガシナン州のすべての教育機関は休校との通達が出され、私のルソン大学も15日から

17日まで授業はなかった。

４日目になって雨がようやく止んだので、外に出てみると、家の前の道路がまるで川のように泥水が流れているのには驚いた（写真）。日本でも水害時にはこのようなことはしばしば起こるので、テレビ等で見たことはあるが、私自身のことで言うと、このような災害は体験したことはないのでただ驚くばかりである。道路を歩く人は靴を履いている人はおらず、皆ゴム草履履きである。時折長靴を履いている人を見かけるが、このような人はまれである。

浴衣の着付けを終えて大喜びの３人の学生

フィリピンでは台風、モンスーン、地震のような自然災害は毎年あちこちで起こり、その惨状を目にしているが、いざ自分が体験してみると、フィリピンの人々の災害に対する考え方や対処の仕方が我々の場合と全く異なる。彼らは災害に立ち向かうのではなく共栄共存を図っているように見える。

３.ルソン大学で日本語を学ぶ学生を招いて日本語パーティを開く

私が教えているルソン大学で日本語を学ぶ学生が今学期は100名ほどおり、前学期に比べると３倍に増えた。教室で日本語を教えるだけでなく、もっと日本の文化や習慣を紹介したいと思い、自宅に学生を招いて「日本語パーティ」なるものを７月30日、８月27日、９月10日のいずれも土曜日に３回開いてみた。　現在、３クラス教えているので、それぞれのクラスごとに３回開催し、日本語を自由に話したり、さらに知人の藤井弘子さんや地元の日本人の協力を得て、のり巻き講習と浴衣の着付けを行った。いずれも好評であった。やはり食べ物のことやファションは彼らの話題の中心なので、まさにぴったりであった。

一般的に「のりまき」は日本料理としてよく知られているが、ただ実際に食べたことがあると言う人はそう多くはない。マニラや地方でも大きなスーパーに行くと、寿司コーナーがあり、持ち帰り用の様々な種類の寿司が販売されている。ただ値段はと言うと、他の食べ物に比べるとかなり高く、決して安いものではない。

実は、９月５日大学で観光学科主催の「寿司弁当コンテスト」があり、たまたま審査員に依頼されていたので、参加する機会を得たが、コンテストに出ていたのは日本語を学ぶ学生10人で、彼らの大半は私の日本語パーティに出ていた学生で、道理で上手だと感心した。

こんな風にフィリピンの生活は足早に過ぎていった。もう１か月足らずですぐ帰国するが、今までの海外生活の中でフィリピンが一番充実していたのではないだろうか。今度来る時はいつになるか分からないが、これまでとは違う旅行者として様々なものを見てみたい。

雨が止んでから数日たってもこの状態が続いていた

小白山（ソペクサン）・月岳山（ウォラクサン）―㊦

（2016年5月30～6月3日）

関根 茂子

■6月2日（木）　月岳山登山中止、栄州ヨンジュ→仁川（スカイホテル泊）

昨日の小白山がかなりきつかったので、今日はもう歩きたくない。予定していた月岳山はパス、水安堡（スアンボ）温泉泊で再挑戦をS姉にお願いする。

栄州まではタクシーで栄州11:45発仁川空港直行高速バス（27,700₩）で空港へ。

30日にメガネを壊してしまったMさん、空港の店で修理できるか聞くため、Kさんといっしょに空港に残る。私たちは迎えの車で16時ホテル着、ゆっくり休んで2人の帰りを待つ。結局、ホテル近くのロッテマートの眼鏡屋で直してもらい、二人はひと足遅れて戻ってきた。

ホテル近くの行きつけのサムゲタン専門店で打ち上げ夕食の後、共同費から5万₩返金でそれぞれお土産を買う費用にした。

■6月3日（金）　烏頭山（オドゥサン）統一展望台→廣城跡（カンソンホ）→仁川空港

夕方の便で帰国なので、今日は歴史のお勉強コースをチャータータクシーで回る。

まずは、北朝鮮との停戦ライン（国境?）となっている臨津江（リムジンガン）の鰲頭山統一展望台へ行く。その後江華（カンファ）島（ド）の歴史遺跡の城跡を見に行くのだ。

予約したタクシーはホテル9時発、運転は独身の好青年・金さんという。S姉が地図を見せて、希望するところを説明する。Aさんも以前行ったことがあるそうだ。

▲10：00～10：40、展望台は1992年に完成、眼下の川の対岸は北朝鮮領で、ちょうど干潮時で浅い流れのすぐ先が北朝鮮、備付の望遠鏡を覗けば、山の木々を燃料にしたので禿山が多い。対岸の畑で働く人の姿が見える。

▲11：30～12：20、昼食は金浦市内の店で冷麺と蒸し饅頭を食す。午後は江華島へ行く。

✽次頁別記は、S姉の解説文と見解の引用である。

S姉は2001年3月29日、初訪韓以来毎年数回の韓国で沢登りや岩登りをして、韓国人友人多数と交流している。

▲13：00～14：00　今回訪れた廣城跡というところは、1866年フランス軍と闘った城跡である。受付に日本から帰化した女性がいて、彼女の説明を聞きながら一緒にぐるりと回った。見晴の良い高台で、松林の傍らに無名戦士の墓、軍人の墓などがあり、小学生らの社会科見学が数組、木陰で先生の説明を聞いていた。

15時に仁川空港へ戻り、車代30万Wを払う。搭乗手続きをしてから費用の精算で、昨日の5万Wのほか2万Wの返金あり。

仁川空港1835→成田2055 KE705便は、離陸が30分ほど遅れたが、猛スピードで定刻に着陸、24時前に帰宅できた。

計画と現地韓国語会話はS姉、会計は韓国語学習中のTさん、Mさんは事前にPCでの現地情報を集め、気配りのKさんは、おやつをみんなに配る。私は、なんの役に立ったのだろうか。せいぜい植物解説ぐらいが関の山だが、みなさんのおかげで楽しい山旅をさせていただけたことに感謝！

〈費用〉合計約63,000円（チケット代・27,000円、スカイホテル・2泊8,300円、共同山行費用・23,000円［現地宿泊費・交通費・食事代・ほか］、個人費用（土産代・ほか）5,000円　（完）

廣城跡の石門「按海楼」（Googleパノラミオから）

❋別記

江華島は面積408km^2、韓国で５番目に大きな島で人口は約６万人。島の最高峰は摩尼山（マニサン）、468mでハイキングコースが整備され徒歩約２時間の登ることができる。珍島の最高峰・察尖山チョムチャルサンが485mだから、ほぼ同じようなものだ。

ほかに島の中央北寄りに高麗山コリョサン436mもある。朝鮮人参の産地でバスターミナル近くに人参センターがある。ウナギも名産である。京畿道、仁川広域市、江華郡に属するが、ソウル市内からは、地下鉄２の新村駅（240駅）１番出口、現代自動車前から江華島行きのバスで約２時間、3,400₩。仁川からは市外バスターミナルから乗る。金浦市と江華大橋（694m）でつながっている。この島は昔、李氏朝鮮時代には政治犯・謀反人の流刑地だった。

13世紀、1232年高麗の時代に中国・元の侵攻に遭い、首都・開城からこの島に遷都、1270年開城に戻った。1656年、国防のため南東海岸に砲台を作った。1866年、フランスに一時占拠され、1871年にはシャーマン号事件でアメリカに一次占拠された。東アジア諸国はこのころ欧米列強の植民地として狙われてきた。

そして、1875年には江華島事件＝日本軍の雲揚号事件と続き、歴史に翻弄されてくる。1868年に明治政府が大院君に国書を送ったが、受け取りを拒否で征韓論が出てきた。結局、1910～1945年、日本の統治時代となり、それも日本の敗戦で終わり、朝鮮半島は独立を果たしたが、間もなく南と北の戦争となり、今も北朝鮮とは休戦状態、戦争は終わっていない。

植民地化＝その国の富を搾り取る（搾取）ことで、日本が台湾や朝鮮半島で行ったのは併合というのにあたる。現地の産業を興し、生活環境を整え、教育を整備するなどで自国なみに引き上げようとした。台湾での50年間の統治時代には、就学率が数%からなんと92%にまで整えられた。

韓国では日帝時代に～という悪いことばかり強調されるが、生活環境が改善され、道路網や医療も整備、教育もハングルを普及させて就学率が上がった。李王朝時代には漢字が尊ばれ、せっかく作られたハングルも普及していなかった→両班（リャンバン）（官僚）は庶民の使う文字・ハングルを蔑視していた。

ちなみに、インドネシアはオランダが400年間も植民地としていたが、就学率はたったの３%だったという。当該国の富を増やそう…などという考えはないのだ。アヘン戦争のあとイギリスは1997年まで150年も香港地区を統治していた！だが反英というのはあまり聞かれない。中国も韓国も反日ばかりを声高に～。

烏頭山統展望台（⬇）は漢江（ハンガン）と臨津江（イムジンガン）の合流点にある

◆アジアの植民地

1945年、日本は敗戦とともに、アメリカに支配されたが、アジアの植民地は解放されて、主権を取り戻すことができた。

フィリッピン	16世紀からスペインの、19世紀末からはアメリカの植民地
インド	200年以上イギリスの植民地だった。
インドシナ半島	フランスの植民地から、アメリカの～、長引いたベトナム戦争、ベトナム・ラオス・カンボジアなどがある。
日本	敗戦後、現在も、名目的には自立（独立）しているが、アメリカの傘下にある。
朝鮮半島	長年中国の属国とみなされてきた。国内政争でロシアや日本が進出、日本の敗戦後、大国（アメリカとロシア）の思惑で朝鮮戦争となり、北朝鮮と韓国に分断、今も停戦中だが～。
北朝鮮	最近はことあるごとに核開発・核実験で威嚇し続けているが…。
韓国	アメリカ軍が駐留、真の独立国とは言い難い。南北分断の戦争が一応停戦にこぎつけたが、終わってはいない。

スリランカ紀行⑪

私の中のマータレールック

松林蓉子

キャンディとダンブッラを結ぶ幹線路上に発展してきた都市・マータレーは、初めて仏典が作られた寺院の在る街である。スリランカの中部州にあるので何度か車で往来しているはずだが、外国人の私にとってはさしたる特徴も感じることなく通り過ぎてきた。「ここはプランテェーションで働くために南インドから19世紀に移ってきた子孫が多いんだよ」と、タランガッレ・ソーマシリ師が土地模様を教えて下さった。初めてスリランカ観光をした1990年、ツアーコースの中に、マータレーのスパイス・ガーデンも組み込まれていた。気候と水と環境が適していたのであろう。農業が主な産業で、一般旅行者を釘付けにするようなセールス・ポイントがないのに、素朴な人々と自然に囲まれた歴史のある街である。

スパイス・ガーデン

スリランカのスパイス（香辛料）は、もともと山岳地域で採取された野生の植物であった。伝統医療アーユルヴェーダが培われてきたのも、コロンボとキャンディをつなぐ鉄道がマータレーまで延びてきたのも、ココアやスパイスを運んだ西欧人のビジネスと無関係ではない。スリランカが他国に翻弄された要因の一つも、スパイスが原因と言われるほど、ヨーロッパ人にとって魅力があったのであろう。それをスリランカ人は「スパイス・ガーデン」として、ビジネスと結びつけた。商業化する条件が揃い、マータレーには15か所もスパイス園が造られた。

2013年1月、それらのスパイス園の一つであるランウェリ園に入ってみた。ここは毎日開園されて、無料で見て廻ることが出来る。アロエ、山椒、胡椒、生姜、シナモンなど私でも分かる薬草が植えられていた。興味津々だったのは、野菜カレーには、カルダモン、コリアンダー、丁子（チョウジ）、アニシード、クミンシードなどが、カレーのベースとなるスパイスであり、肉類のカレーには玉ねぎ、にんにく、落花生などが加えられるとのことであった。日本語で香菜ことカラピンチャはお料理の飾りや香りの素として使われ、唐辛子ことチリは多様に用いると説明を受けた。

チリの辛さを出すには分量や部位で決まる。日本では乾燥させた唐辛子が多く使われるが、ビタミンCが豊富で消化促進作用がある。適量で風味効果があり身体に効能があるなど…面白いお話であった。もし私がスリランカに住居を構えるならば、スパイス園に足繁く訪れて、観て巡って楽しみたい所である。美容と健康への投資だと考えれば、決して高くない野外学習の場である。

川村幼稚園前で

「ここだよ!! ヤタワラ・パンニャラマ先生の川村幼稚園だよ。園長はお姉さんに任せているらしいけれど」。偶然のことに、ランウェリ・スパイス・ガーデンの道路を隔てた場所に在った。以前から訪問したい幼稚園であったので、やっと願いが叶った。残念ながら、道路の混雑渋滞が続いて開園している時間帯に間に合わなかった。園児は帰り、静かな園庭に遊具がみてとれた。道路側から扉越しに2階建てが見え、土地柄イスラム教、ヒンドゥ教、仏教の宗教に関係なく60人の園児が仲良く通園していると云う。ソーマシリ師は「日本人が出資して下さった幼稚園では、感謝の心を込めて日本名称になっているんだよ。毎日、日本の国歌と童謡が歌われて…云々」と云われる。それだけでも友好親善であり意義がある。ここで舞台を日本に移そう。私の知るパンニャラマ師のことに触れたい。

師は、大菩提会日本拠点である、香取市の蘭華寺に住まわれ、ときどき、スリランカの川村幼稚園に

ランウェリスパイスガーデン　（パノラミオから）

川村幼稚園（蘭華寺のヤタワラ・パンニャラーマ氏提供）

足を運ばれている。日本での寺暮らしは、もう20数年になる。日本語も堪能で瞑想道場での指導、手塚治虫画『ブッダ』に学ぶ『もう迷わない生き方』等、仏教関係の書物の監修など多岐にわたっている。私が最も感心したことは、パンニャラマ師の法話である。日本語も的確で師のメッセージが詰まっていた。スリランカマータレーの川村幼稚園参観は、またの機会に譲るとして、パンニャラマ師が、日本とスリランカを往来しながら、根の張った真面目な伝道布教活動に取り組まれていることに敬念を抱く。

アルヴィハーラ

マータレー郊外にアルヴィハーラ寺院が在り、昔はマートゥラと呼ばれていた。明るい寺院の意味である。ダンブッラと同じく石窟寺院で創建は紀元前1世紀で古刹の類（たぐい）である。沢山の仏典が保存されていることでも知られている。その程度のことはガイドブックでも紹介されているが、スリランカ仏教史の重要なことと詳細な経緯は、全てソーマシリ師を仰がねばならない。当寺史によれば、「大乗仏教」と深い関わりがある。

スリランカの仏教は様々な紆余曲折の末、小乗仏教だけがのこされているが、かつて、小乗仏教僧と大乗仏教僧が教義を巡り壮烈な争いをした時代があった。アルヴィハーラは、かつての大乗仏教僧たちが此の石窟寺院に集い、意見を述べ合う集会所として利用していた場所とのことである。大きな岩をくり抜いて造ったアルヴィハーラは、太陽の当たる設計となっていた。寺院内には寝仏や瞑想仏像、立像が安置されている。ジャータカ物語（注）の説話がフレスコ画で描かれていて、窮屈そうに感じる。もっと広いスペースがあればと思いながら第2窟の地獄絵図と対面した。罪を犯した人間が死後の世界で裁かれているのは圧巻で、子供たちには無言の教育場となる。岩山には図書館があり、教典や仏像が保存されている。

ソーマシリ師によれば、昔、僧侶たちが記録を残すために椰子（やし）の葉（パピラ）を蒸し、日干しにしてなめして紙としたとのことで、アルヴィハーラは、その上に、お経が最初に文字で書かれた歴史的な場所であるとのことだ。炭、米粉、植物性油脂を用いて文字を書いたとのことだが、それは、現在私たちが使っている紙より丈夫だそうである。図書館には日本から届けられた『般若心経』があり、スリランカの『パーラミッタ』という仏典と同じだと聞かされた。北伝、南伝、あるいは海のシルクロードを経て日本に到った仏様の経典が、アルヴィハーラに収納されている。仏教伝播の妙に感動した。

（注）ジャータカ物語　ブッダが前世に菩薩として修行していたときのエピソードを集めた物語。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を 1cm ほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

‘わんりぃ’は、いつでも新入会を 歓迎しています。
年会費（4月～3月）：1500円　入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011　‘わんりぃ’
年度途中からの入会は会費の割引があります。下記連絡先にお問合せください。
☎042-734-5100 又は E-mail:wanli@jcom.home.ne.jp

‘わんりぃ’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回（2月・8月を除く）おたよりをお送りします。
②‘わんりぃ’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100（事務局）

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい ‘わんりぃ’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。
◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

['わんりぃ' 活動報告] 秋の恒例・手づくり月餅の会　2016年9月11日(日)　麻生市民館

今年の中秋節、9月15日を前に、タイミング良く、9月11日(日)に、新百合丘駅前の、川崎市麻生市民会館で、「手づくり月餅の会」を開催した。

今年は、コープみらいのブロックニュースに、開催のお知らせが掲載されたので、生協のメンバーが13名も参加された。募集人数を17名としたが、当日は、申し込み無しの飛び入り参加もあり、スタッフを含めて、総勢24名が集まった。

これまでは、前日に皮・餡の用意をして置き、当日は、皮・餡は、作り方のデモンストレーションを見ていただいただけで、直ちに型作りに入ったが、今年は、皮・餡共に、当日一緒に作ってみた。準備に不手際があったり、備品としてあると思った用具が無かったりと、綱渡りの連続だったが、何とか講習会を終えることが出来た。

しかし、皮と餡を当日作るのには、時間的に無理があり、せっかく用意していた「美味しい中国茶で、出来立ての月餅を試食しよう」との計画は、お茶をゆっくり頂く時間が取れなくて、流れ解散のような形になり、ちょっと残念だった。準備もさることながら、講習時間が2時間半と言うのも短く、せめて3時間は予定すべきだったと思う。

しかし、前述したように開催の日時は絶妙で、皆さん、月餅づくりを楽しんでくださったようだった。「前々から作ってみたかったので、とても楽しかったです。」との言葉を何人もの方からいただいて、わんりぃとしても、有意義な講習会だったと自負している。（有為楠 君代）

《'わんりぃ'掲示板》

第11回・2016中国映画週間

TOHOシネマズ日本橋(日本橋三越前)

2016年10月21日(金)～26日(水)

中国映画の最新作11作品を上映(詳細：http://cjiff.net)

〈開催記念式典及び授賞式〉

開催最終日となる10月26日に本映画週間の開催を記念し、来日ゲスト他が参加して行われるメイン・プログラムとなる日本の篠笛奏者と中国の京劇俳優によるコラボレーションを行います。

▲**日本の篠笛奏者＝佐藤和哉／中国京劇俳優**(劉東風／劉妍)

- 10月26日(水)14：00～
- **場所**：TOHOシネマズ日劇(スクリーン1)
- **映画上映**：**「ロクさん」** http://ameblo.jp/lalapit/entry-12115720208.htm
- **チケット**：記念式典 10月8日は　2000円
  一般映画上映会 10月10日～は1500円

◆**問合せ**：NPO法人 日中映画祭実行委員会
☎03-6450-6766　FAX03-6450-6767

【関連イベント】

2016東京中国映画週間特別展示会「映画の旅展」&中国映画上映会　●**参加無料**

- 2016年10月25日(火)～11月4日(金)
- 10:30～17:30(初日13:30～／最終日13:00迄)
- 場所：東京中国文化センター
  - 映画関連の中国都市パネル展示と映画使用の小道具
  - 映画祭上映作品の日替り上映
  - 映画出演者の舞台挨拶などミニイベント

【2016年10月定例会・11月号'わんりぃ'発送日】

- 10月の定例会：10月7日(金)13：30～
- 11月号のおたより発行日
  10月30日(日)10：30～お弁当を持参ください
- 場所は、共に三輪センター・第三会議室

◆問合せ：☎042-319-6491(わんりぃ)

第20回「日中学院倉石賞」候補推薦のお願い

1951年、「日中学院」の前身「倉石中国語講習会」を創設した倉石氏は、1972年の日中国交正常化までの21年間、苦難、苦闘の歴史を歩みした。その間「中国語を学んで日中友好の架け橋になろう！」の旗印をかかげ中国語教育の普及と発展に力を注ぎ、日中友好の架け橋となる人材を多く輩出してきました。倉石先生の没後、ご遺族からの寄付金をもとに1989年に「倉石武四郎先生記念基金」を設けました。今年で第20回を迎えます。今年も多くの方々のご推薦を願っています。

第20回日中学院倉石賞推薦要項

- ▲**対象**：①民間中国語教育の普及・向上及び日中文化交流などに貢献した個人・団体　②中国語の教育、研究、翻訳等に関する業績・著書・論文(在日本、中国を問わず)
- ▲**募集締切**：2016年11月30日(水)
- ▲**授賞式**：2017年2月中旬(予定) 賞状と賞金の授与
- ▲**問合せ**：03-3814-3591(日中学院倉石賞係)

詳細は上記にお問合せください。

曹雪晶 二胡コンサート

チェロ：諸岡由美子、ピアノ：西音あき子

演奏予定曲：草原上、牧羊女、スラブ舞曲、リベルタンゴ他

2016年11月2日(水)19:00開演(18:30開場)

ルーテル市ヶ谷ホール 4000円(全席自由)

新宿区市谷砂土原町1-1☎03-3260-8621
(各線)市谷駅下車／JR線・都営地下鉄(A1出口)／東京メトロ有楽町線・南北線(5、6番出口) http://www.l-i-c.com/hallindex.html

※未就学児のご入場はご遠慮ください。

◆**チケット購入方法**：オフィス・和弦
☎090-8775-7981、FAX：03-6912-7607
E-mail：25wagen@gmail.com

第26回中国文化之日 中国大黄河雑技団・中国呉橋少女雑技団公演

本年で第26回目を迎える「中国文化之日」は、中国国内はもちろん、世界各国で人気の高い“中国の雑技”に焦点をあて公演を行います。悠久の歴史を持つ伝統的な芸術でありながら今なお人々を魅了する雑技の華麗なる技をはじめ、おめでたい雰囲気を観客に届ける「獅子舞」、秘技の「変面」、会場を笑いで一体化させる「コミカルショー」などで演目が構成されています。

11月12日(土)、13日(日) 共に14:00 ～ 全2回公演
30分前に開場、上演時間は約60 ～ 70分

会　場：日中友好会館地下1階大ホール
〒112-0004　文京区後楽1-5-3　都営大江戸線・「飯田橋」駅C3出口より徒歩約1分/他

前売り1,000円、全席指定(※3歳未満の入 場は不可)、空席があれば当日券1,200円

▲チケット購入方法：日中友好会館窓口、イープラス、ファミリーマート(Famiポート)にて9月12日(月)より販売開始。　※日中友好会館窓口　平日9：00 ～ 17：00
※電話予約、通信販売、チケット取り置きはいたしかねます。事務局にいらした方から先着順で販売いたします。

▲**主催**：公益財団法人日中友好会館　協力：有限会社チャイナ企画
▲**後援**：中華人民共和国駐日本国大使館、(公社)日中友好協会、日本国際貿易促進協会、(一財)日中経済協会、日中友好議員連盟、(一財)日本中国文化交流協会、(一社)日中協会、中国文化センター
▲**問い合せ先**：公益財団法人日中友好会館文化事業部
☎03-3815-5085 ／FAX 03-3811-5263　E-mail:bunka@.jcfc.or.jp

【わんりぃ・料理の会10月】　上海出身の宣芳(せん)さんの指導で

中国チマキの巻き方をマスターしよう(お土産付)

2016年10月10日(祝)　10：30 ～ 14：30　麻生市民館・料理室

もち米を笹の葉でつつんだ中国チマキ。色々種類もあって美味しいですね。
沢山作って冷凍して置けば非常食にもなります。手土産にしても喜ばれます。
徹底的に巻き方の練習(お一人15個)をして、お昼に頂いた残りはお土産にしましょう。

●参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 会場費) ※留学生は無料
●募集人数：15名　●持ち物：エプロン、筆記用具
◆申込みと問合せ：☎080-5460-8710　Email：jane_syjp@yahoo.co.jp　‘わんりぃ’崔(さい)

お昼のメニュウ：上海風チマキ(肉餡、小豆餡)/くらげのサラダ/ココナッツミルクと里芋のデザート

◇わんりぃの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持よく発声しよう!!

▲10月の講座：25日(火)
▲11月の講座：29日(火)
▲**会　場**：まちだ中央公民館･音楽室
▲**時　間** 10:00～11:30
★動きやすい服装でご参加ください
●**練習曲**：「ひとつの種」
●**講　師**：Emme(エメ)(歌手)
●**会　費**：1500円(会場使用料･講師謝礼など)
●**定　員**：15名(原則として)
◆**申込み**：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp(わんりぃ)

◇わんりぃの催し

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

▲**10月の講座**　9日(日)　10:00 ～ 11:30
▪会場：まちだ中央公民館 第7学習室8F

▲**11月の講座**　11月23日(祝)10:00 ～ 11:30
▪会場：まちだ中央公民館 第7学習室8F

▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
▲会費：1500円
(会場使用料・講師謝礼など)
▲定員：20名(原則として)
＊録音機をお持ちの方はご持参下さい。
◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

《'わんりぃ'掲示板》

世界の子供たちが描いた、表紙とも13枚多色刷りのとっても可愛らしいカレンダー

(公財)日本国際連合協会 世界児童画カレンダー2017 (B3サイズ/36.4×51.5cm)

1部1080円(税込・送料1本300円) 11月中旬より発送になりますので、12月に予定の'わんりぃ'の活動に参加される皆様の分は、'わんりぃ'事務局で取りまとめ購入申し込みをします。(送料無料、但し、送付はしません)

◆ **'わんりぃ'12月活動予定**：2016まちカフェ(場所：町田市役所/12月4日)、「漢詩の会」「ボイストレ講座」、「中国語勉強会」、「料理の会」

ご自分で購入の皆さんは、(公財)日本国連協会 へ直接お申し込みください。☎03-622-6831Fax 03-6228-6832

全員集合!! 第19回 町田発国際ボランティア祭 2016夢広場

～ この星に平和と希望を ～

11月3日(祝) 10：00～16：00 於：まちの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている団体が結集の、エスニック気分溢れるお縁日です。今年の目標は

熊本県大地震 被災地の子供達の、教育分野への温かな復興支援！

▶ **問合せ：☎042-722-4260 町田国際交流センター**

● **主催**：2016夢広場実行委員会 ● **共催**：(社福)町田市社会福祉協議会／(一社)町田青年会議所

【無料セミナー】中国漢字文化シリーズ講演会

「甲骨文から見る中国文化」 甲骨文の造り方・使い方・覚え方・書き方等に焦点を当て、中国文字の成り立ちを文化と芸術の両面から触れる。

- ▲9月14日(水)「甲骨文の造字法・用字法」(終了)
- ▲10月12日(水)「甲骨文の覚え方」
- ▲11月30日(水)「甲骨文の書き方～八非の法則～」

● **場所**：東京中国文化センター
● **14：00～15：30**(60分講演、30分質疑応答)
● **申込**：「甲骨文から見る中国文化申込」と書いて、
①参加氏名(フリガナ) ②電話番号 ③メールアドレス
④希望参加日を、中国文化センターへ

FAX:03-6402-8169 ／E-Mail:info@ccctok.com

初心者のための【鶴川水墨画教室】体験のお誘い

初心者のための水墨画教室です。生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。
季節に応じて身近な風物を描ける楽しさを味わえます。

- ● **講師**：満柏(会長)
- ● **場所**：**鶴川市民センター**(駐車場有)
  小田急線鶴川駅「北口」から徒歩3分
- ● **曜日・時間**：毎月第2、第4(月)
  午後2:00～4:00
- ● **体験参加費**：1000円 **見学**：無料
- ● **問合せ**：野島 ☎042-735-6135

【夢広場予告!】 町田市忠生にある曹洞宗寺院・東向山薬田寺周辺の女性たちとスリランカの女性たちの交流から生まれた、こんな可愛い、手作りの抱き人形たちが、夢広場で販売されます。お孫さんへのプレゼントは如何!?

1体 1500円(収益は国際支援に使用されます)

'わんりぃ' 217号の主な目次

北京雑感(107) 中秋節 ……2
論語断片⑳ 不憤不啓 ……3
大連・長春・丹東の旅(その1) ……4
「漢詩の会」たより④「秋風辞」 ……6
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義 Ⅶ ……8
東西文明の比較(8) ……10
フイリピン滞在記⑮ 最近の様々な出来事から……12
小白山ソペクサン・月岳山ウォラクサン㊦ ……14
スリランカ紀行⑪ 私の中のマータレールック……16
['わんりぃ'活動報告]秋の恒例・手づくり月餅……18
'わんりぃ'掲示板……18・19・20